

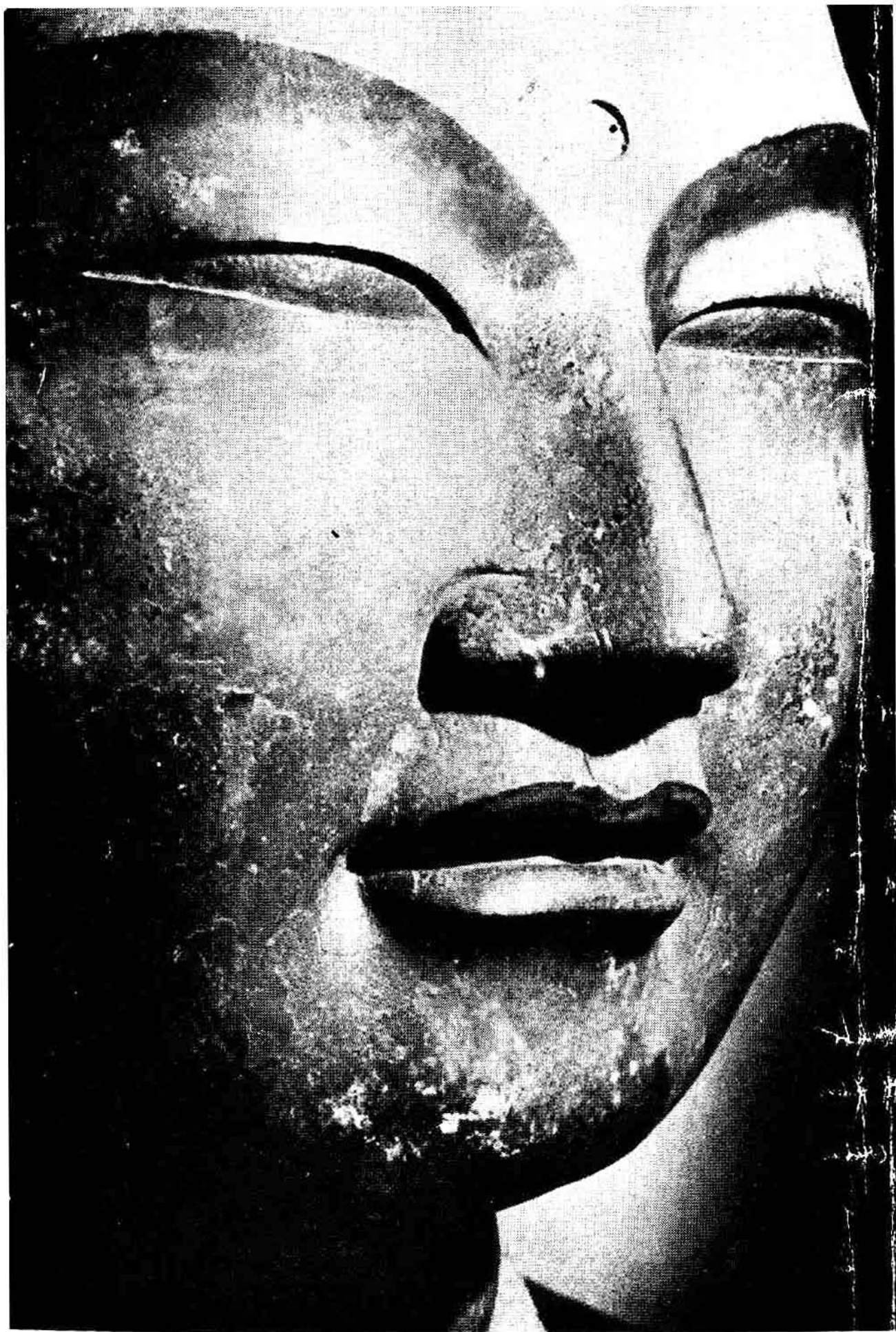
家永三郎著

日本文化史



岩波新書

D 84



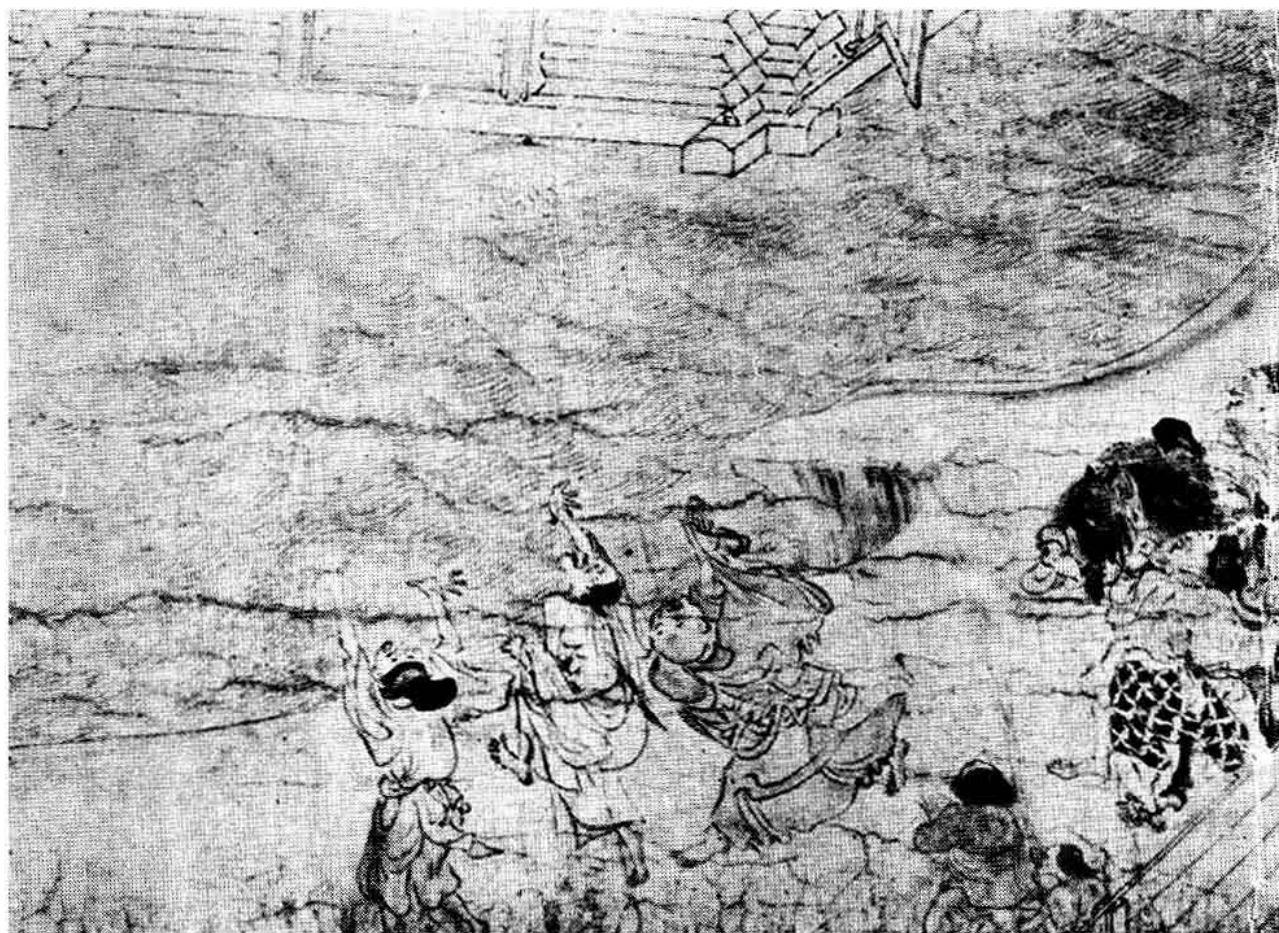
興福寺の仏頭 (64頁参照)

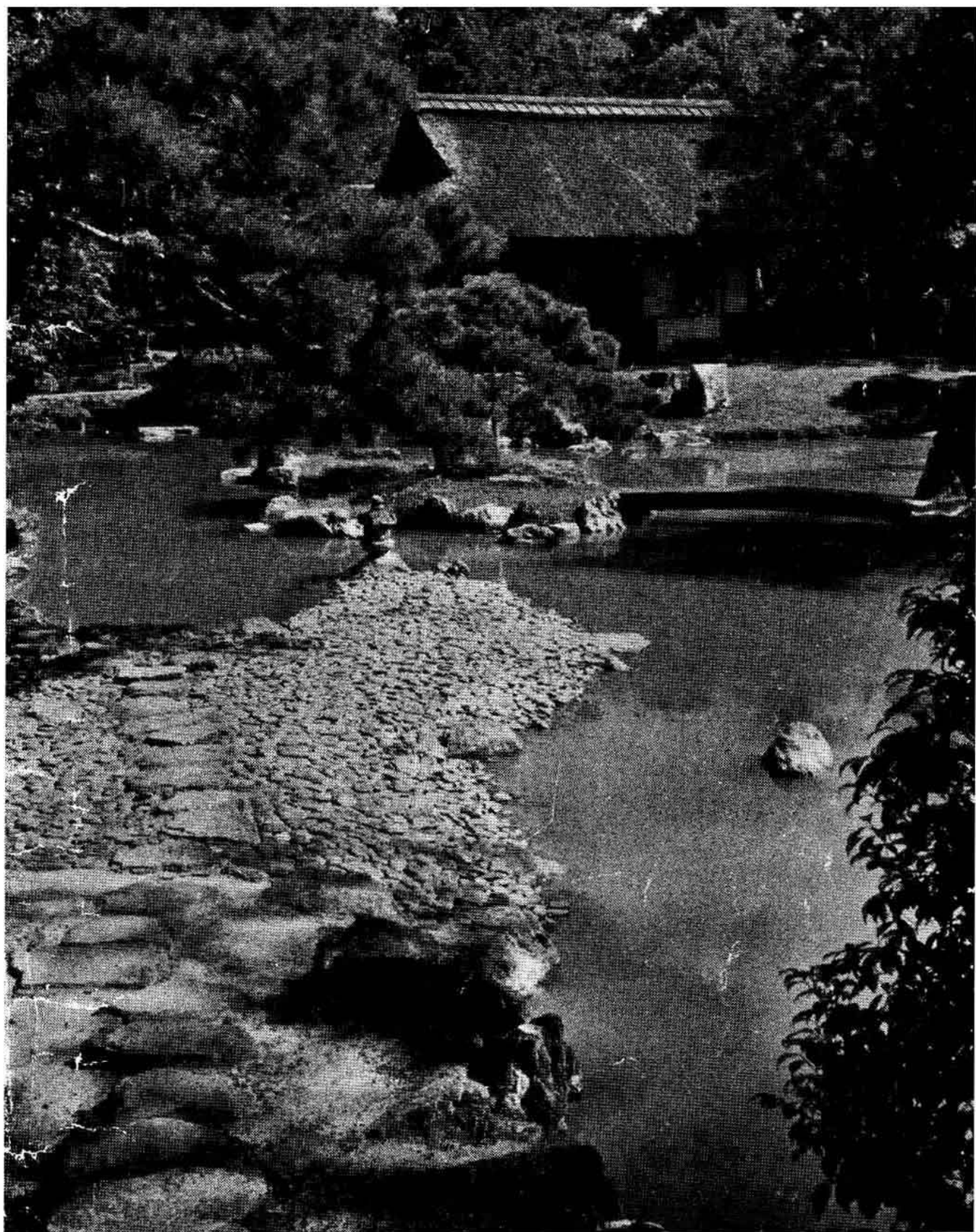


信貴山縁起絵巻 (100 頁参照)



雪舟の『山水長巻』 (151 頁参照)





桂離宮（庭園より松琴亭を望む，167頁参照）



家永三郎著

日本文化史

岩波新書

367

はしがき

戦後、日本史に関する出版物はすこぶる多いが、日本文化史を概観するための手頃な書物は、ほとんど見あたらないようである。かつての文化主義史観に立つ日本文化史とはちがった意味での概説が一つくらいあってもよいと考え、新書編集部の熱心な要請を容れて執筆したのが本書である。

文化のそれぞれの分野を対象とした特殊文化史とでもいうべきもの、たとえば日本文芸史とか日本美術史とかいった類の書物はりっぱなものがたくさん世に出ているが、日本文化全般の発達を概観した日本文化史の通史は、少くとも戦後にはあまり出ていない。しかも、日本文化にたいする一般の関心の高まっている昨今、日本文化の発達を一目で見わたすことのできる通史のないことは不便ではないか。新書の中に日本文化史の一冊が企画され、それが著者に割当てられたのは、そういう理由によるものであった。

この本では、日本文化の発展の大すじを、著者の平素の考えにしたがって大胆にえがき出すことに主眼をおいた。だから、こまかい問題に深入りすることを避け、著者がくわしい知識をもたないことがらは、かなり重要なことでも筆をはぶいたりしているので、網羅的な概説とはなっていない。新書一冊の小さな分量で日本文化史をまとめあげるとすれば、それがもつとも適当なや

り方であろうし、精細な知識が必要なひとのためには、各時代または各部門ごとに専門的な書物がいくらかもあるはずだと考えたからである。また本来ならば、一九五〇年代の現代にまで及ぶべきところを、一応江戸時代までにかぎり、明治以後は、問題点をざっと見わたすにとどめ、その具体的検討を別の場所にゆずったのも、同じような制約を顧慮したためであった。

そういう執筆方針をとったものの、いたるところで専門研究者の研究成果を利用させていただいている。いちいち註記こそできなかったけれど、その点それぞれの研究者にあつく謝意を表したい。

新書編集部から日本文化史を書くように御依頼を受けたのはもう数年前のことである。だが、一人で日本文化史の全体を論ずるなどだいそれた試みであることがよくわかっていたので、なか筆を執る決心がつかず、とうとう今日にいたった次第である。いよいよ思いついてその「だいそれた試み」を執行したわけであるが、おそろくいろいろと批判の余地の多いものができあがったことだろうと思う。今後機会あるごとに筆をくわえて少しでもよいものにしていききたいと思っている。読者諸氏の遠慮のない叱正をお願いしたい。

一九五九年八月二十日

家永三郎



でい がん
泥 眼 (能 面)
眼に金泥が流してある、女性の嫉妬を端的にあらわした面。

目次

はしがき

はじめに——日本文化史の課題(一)

I 原始社会の文化(九)

歴史の出発点——原始社会とはどういう時代か——縄文式土器——生産力の停滞——呪術の支配

II 古代社会初期の文化(二七)

金属文化の渡来——階級と国家の成立——天皇制国家の形成——民族宗教としての祭り——『古事記』『日本書紀』の伝える物語——古代文化と性——日常生活

III 律令社会の文化(四三)

律令機構の成立——大陸精神文化の輸入——飛鳥・白鳳・天平の仏教芸術——伝統的芸術の新しい展開——平安初期の文化

IV 貴族社会の文化(七六)

貴族社会の特色——物語文芸の発達——絵巻物の発達——貴族文化の地方と海外



への進出——都会と農村の生活文化

V 封建社会成長期の文化(二〇)

武士の勃興とその歴史的意義——武者の習の成立とその文芸的把握——新仏教の成立——理論的な著作の出現——貴族文化の伝統——荘園体制の解体と古代勢力の滅亡——文化の下剋上——宗教の世俗化による新しい文化の発達——室町時代の日常生活

VI 封建社会確立期の文化(一九)

武将と豪商の美術——西洋文化との最初の接触——封建秩序の固定と儒教道德の思想界制覇——学問の興隆と教育の普及——町人芸術の発達——元禄時代町人文化の特色

VII 封建社会崩壊期の文化(一九)

封建秩序の傾斜と町人芸術の爛熟——科学的精神の誕生——革新的な社会思想の展開——文化の地域的および社会的な拡がり

むすび——日本の近代化と西洋近代文化の摂取(三六)

日本の近代化とその特色——日本近代文化の特色——「第二の開国」と日本文化の動向



I 原始社会の文化

歴史の出発点

昔は国家のはじまりを歴史のはじまりとする考え方が支配的であった。国家の大きな権威の前に国民をひれ伏させてきた時世では、国家のなかった時代は、まだ人間とはいえない動物の時代であるかのよう^にに見なされていたようである。国家のない時代があったという事実を教えるのは、国家が人類の生活に必ずしもなくてはならないものでないことを教える結果となり、ひいては、将来ふたたび国家のない時代のくることを希望する「危険な」思想をみちびきだすおそれがあったからであろう。戦前の小学校や中等学校の教科書で原始社会の歴史が全然書かれていなかったのは、直接には「神代」^{かみよ}の説話で日本歴史を書きはじめた結果、原始社会の置き場所がなくなったせいでもあるが、根本的には、右のような深慮遠謀によるものでもあったにちがいない。

また、それと平行して文献に記されるようになったころから後を歴史の時代とし、文献のない時代を先史時代とよんで、まるで歴史以前の時代であるかのようにとりあつかう習慣もおこなわれた。具体的には、たいていの場合、上にのべた、国家のなかった時代を歴史以前とする考え方と同じ結論になり、原始社会は先史時代にはいってしまふのである。

今日では、文献だけが歴史を知るための史料ではないという考えが常識になっている。先史時代という言葉だけは、まだ考古学者の間に残っているが、実際には歴史の中の一つの時代として疑われてはいない。国家についても、国家は人類の歴史のある段階ではじめて発生する社会形態の一つにすぎない、したがって、将来いつか消滅するであろうところの歴史的産物と考えられるようになっており、国家以前の人類生活の長い歴史が重要視されるようになっていく。

人類の歴史は、人類がはじめて生産用具をつくり出し、社会的な生産労働をはじめた時代から始まる、というのが今日の学界の通説である。そして、最古の生産用具であり文化である石器の発生から歴史を書きはじめのがふつうである。戦後には、日本でも、日本歴史の教科書で「神代」から書きはじめることをやめ、石器時代の歴史から始める習慣が確立した。

このように、日本の歴史もまた石器の発生にはじまるわけであるが、石器時代は、社会の構造からいって、原始社会とよばれる段階に当るのである。

原始社会とはど ういう時代か

つい最近まで、縄文式土器じようもんしきの使われていた時代だけが日本の石器時代と考えられていた。ところが一九四九(昭和二十四)年に群馬県岩宿いわじゆくで土器をともしない石器が発掘されてから、縄文式土器文化の前に無土器文化のあったことが明らかになった。しかし、無土器時代についてのくわしいことは、今はまだ明らかにされていない。

いづれにしても、石器時代には、農業耕作は行われず、人々は山野でシカやイノシシをとらえ、

海や川で魚や貝をとり、食用植物をあつめて生活をしてきた。このため、それほど大きな集団生活もいと生まれず、余剰物資の蓄積による財産も形づくられなかった。したがって富の力を基礎とした政治的権力も生れでなかった。階級の対立もなく、国家の権力もない社会、それが原始社会の他の段階の社会と根本的にちがう特質である。

縄文式土器

日本の原始社会がどのくらいつづいたかは明らかでない。文献のないこの時代の絶対年代を正確に計算する方法は、

現在の科学の力ではまだむつかしい。しかし、それが数千年の、非常に長い年月にわたっていたことは疑いない。

私たちの祖先が、この土地に移ってきたときには、日本の土地はまだアジア大陸と陸つづきであったかもしれないが、その後、石器時代の人々は、この列島で大陸の文化の影響を受けることなく、石器文化を日本社会の内部だけで少しずつ高めていったのである。天然の資源を採取して生活資料とする低い生産力の段階から飛



第1図 縄文式土器

躍することは、日本石器時代人の力ではとうとうなしとげられなかった。しかし、その段階の中で、かれらは石器と土器との製作技術を、石器時代としては最大限にまで高めることに成功したのである。縄文式土器の数多い様式と豊富な意匠が、それを物語っている。

たとえば、関東地方の縄文式土器についてみると、**早期**の井草—大丸式、夏島式、稻荷台式、平坂式、三戸式、田戸Ⅰ式、田戸Ⅱ式、子母口式、茅山式から**前期**の花積式、関山式、黒浜式、諸磯a式、同b式、同c式、**中期**の五領台式、勝坂—阿玉台式、**加曾利**EⅠ式、同Ⅱ式、**後期**の堀之内Ⅰ式、同Ⅱ式、加曾利BⅠ式、同Ⅱ式、同Ⅲ式、曾谷式、安行Ⅰ式、同Ⅱ式、**晩期**の安行Ⅲa式、同b式、同c式（いずれも考古学者が遺跡地名によってなづけた様式名）という、大別して五、**細別**すれば三十に達する様式上の段階が認められるのであり、縄文式土器が長い年代にわたり、年を追ってその様式を変化させていったあとがよくわかる。そして、**撚糸**を器面にころがして文様をつけただけの単純な早期のものから、ほんとうの縄文をつけ、次第に複雑な外観をもつようになった前期のもの、彫刻や透彫りを加えた、立体的な装飾に富んだ中期のもの、深鉢・浅鉢・台附鉢・皿・土瓶形・香炉形など、器形においても、文様においても、千変万化をきわめ、華麗をつくした**後期**・**晩期**のものにいたるまで、その多様多彩なことは驚嘆に値する。縄文式土器の、こうした豊富な意匠の展開は、硬玉にあなをうがった石工技術の発達とあわせて、日本文化史の一つの特色をなす工芸的技術の熟達が、すでにこの段階からあらわれていることを考えさせるに足りよう。